群れ

田中浩司

父親は以前から血便が出ている。少し離れた所にいても胃が強く鳴っている音が聞こえてくる。トイレから出て来た後は便器に黒い便や真っ赤な血がこびり付いている。その黒い便はコールタールのような便である。甲府市の雑誌に書いてあるが、黒い便や血便が出たらただちに一一九番をして下さいと書いてあるが、母に相談しても何も言わない。また、市役所の保健師に相談すると、父親の性格をわかっていて、「本人が何も希望しないのだから、病院へ連絡しても駄目です」と言われた。しかし私は見て見ぬふりはできないので、父親の主治医には電話で伝えた。

昨年のことだが、父は血尿が出ていて、七ヵ月も説得して、やっと大きな病院へ私と一緒に行ってくれたが、父は泌尿器科の医師に「こいつは統合失調症を煩っていて本当のことは言わないぞ」と言った。そして医師に「好きな酒が飲めてこのまま死ねればいいです」と言った。医師も怒り出し「その酒もいつまで飲めるかわかりません」と強く言われた。

私はこんな父に対して、老人の生活や介護の支援を専門とする市から委託された包括支援センターの職員に抗議してもらうように頼んだのだが、父も母も包括支援センターや市役所のお世話になりたくないと言っているかぎりそれはできないと言われた。包括支援センターは困っている私がいても見て見ぬふりをするところだと実感した。警察署に相談すると甲府市を相手取り裁判をするようにと言われた。

母も三年前に、暮から正月にかけて寝込んでいた。おかしいと思い体温を計ると、三十八度も熱があった。ただちに救急車を呼んだ。一月二日のことであり病院などどこもやっていないが、なんとか開いている病院へ連れて行ってもらった。肺炎を起こしているということで、ただちに入院になった。

父も母も、誰にもお世話にならない生き方をしている。甲府市役所からも包括支援センターからも相手にされない。みっともないと思う。世の中は助け合いで自分が困っているときは、はっきりと助けてくださいと言うべきだ。また、自分も誰か困っている人がいたら助けてあげるべきだ。それが社会であり、人間は群れの中で生きていく生き物である。

父も母も認知症が疑われるが「自力で生きていく」と二人とも言っている。そして、父と母の寝床の床下にはアスベストがあり、再三にわたり私も他の人も取り除くようにすすめているのに、二人とも「いいや」と言っている。私ももうこの二人は助けてあげないで

いようと思う。いつ別れがきてもいいように、一ヵ月の三分の一はビジネスホテルに泊まって、そこから会社へ行っている。一人で生活していく準備は完璧にできている。

私は、会社と市役所と関っている。この人たちの仲間であり、そこが間違っていてもあまり抗議せず仲間のいうことには従い共にいる。私は自分の信念をつきすすめない。市の職員と話をすることで、統合失調症の再発を防いでいるはずだ。だから市役所には服従する。おそらく死ぬまで市役所と関っていくだろう。

保健師は、父が血尿が出たとき、お父さんはこのまま死んでしまおうとした、と後に言っている。父も母も死を軽くとらえている。第二次世界大戦を経験したことがあるのに、つまらないことだ。だから生も軽くとらえているはずだ。人間が自分自身がなぜ生きているかなどとは考えたこともないだろう。生きることに熱心ではない。冷たい人たちだ。

父親の認知症だと確実に分かるところは、見捨てられ妄想が一番特徴的な症状として現れる。介護者に負担をかけていると現れる症状である。

父が寝室で眠るときになると、わざわざ居間へ来て、テレビを見ている私がいるか確認にくる。また、私の帰りが遅いと居間で待っている。よく私を確認にくるので、父がくる気配がすると、最近は居間から出て、庭へ行き木の陰に私は隠れる。しばらくしてから居間へ行くと、父は居間でゴロリッと横になっている。「ほら、お父さん、それが認知症」と言うと、急いで寝室に戻って寝床につく。

また母がデイサービスに行くときに、少し離れて母の後ろをつきまとう。またあるとき母の買い物の帰りが遅いと、警察に電話をしてパトカーを呼ぶ。しばらくして母が帰ってきて、母に怒られる。

私は、「お父さん、精神科へ受診してください」と言うと、父は大声で「俺は死んでも精神病院へは行かない」と言う。

包括支援センターの職員が家に来て、父の様子を見ても父はいつもあらたまったよそいきの態度を見せるので、包括支援センターの職員は認知症と確認できないと言う。そして「浩司さん、お父さんが話が通じなくなってしまったら我々が精神科へ連れて行きます」と言う。

だから私は、行き先も言わずにこっそりとビジネスホテルに泊まりに行く。早くボケさせてしまおうと思う。そして私がいない間、攻撃の対象は母になり、私が帰ってくると母はいつも怯えている。